

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：23702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K11920

研究課題名(和文)慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」を基盤とした看護理論の創成とその活用

研究課題名(英文)Creation and Utilizing of Nursing Theory Based on "Difficulty in Telling" to Others in Chronic Illness

研究代表者

黒江 ゆり子 (KUROE, YURIKO)

岐阜県立看護大学・看護学部・教授(移行)

研究者番号：40295712

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文):慢性の病いとともにある人々の他者への「言いづらさ」について、ライフストーリーインタビュー、慢性の病いとともにある人々の体験記、日本における近代小説、看護職のストーリー及び有識者会議から導かれた知見を、H.S.キムによる理論構築の考え方を基盤に、クライアント領域、ナース-クライアント領域、及び実践領域として著し統合するとともにR.アトキンソンの元型的経験として解釈しながら、導かれた内容から実践領域モデル案を構築した。さらに、それらを共有・活用した看護実践者の語りから、実践領域モデル案に修正を加え、アンテセーデンツ(事前要件)を含む新たな実践領域モデルを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

慢性の病いとともにある人々は、自分の病気に関連することを他者に語ろうとするときに多様な「言いづらさ」に直面していることが確認され、その先行経験が示唆されたことから、他者はこのような状況にある人々のことをより豊かに理解することが可能になる。同時に、「言いづらさ」があることをふまえて一人ひとりを捉えることで、より相応しい支援を構築することができる。また、このような「言いづらさ」は病気状況のみに限られたものではなく、私たちの生活の中で多様に存在しており、そのことに私たちが気づくことによって、「語る」「語り聴く」ことを通して、相互に尊重できる関係の構築が可能になる。

研究成果の概要(英文):The knowledge gained from Life story Interviewing, memoirs of each individual living with chronic illness, Japanese literary works, the stories of Nurses and the discussions of council of advisory about difficulty in telling to others about the living with chronic illness, we integrated them as The Domain of Client, The Client-Nurse Domain, and The Practice Domain of Nursing and interpreted them as Archetypal experience of R. Atkinson, and created the new model of the practice domain based on the way of developing the nursing theory of H.S. Kim. Furthermore, from the stories of nurses sharing and utilizing those, we revised the model of the practice domain, and made the new model of the practice domain including Antecedents.

研究分野：看護学・看護哲学・慢性看護学

キーワード：言いづらさ クロニックイリネス ライフストーリー クライアント領域 ナース-クライアント領域
実践領域 元型的経験 看護理論

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内・国外の研究動向等

慢性の病いの捉え方については、1980年代にA.ストラウスらが病気の慢性状況の特性をクロニシティ(慢性性)として紹介し(南裕子監訳:慢性疾患を生きる,医学書院,1987)慢性領域の研究者・実践者に大きな影響を与えた。その後、ストラウスらはクロニシティの概念を一層発展させ、患者と家族のインタビューから導いた「病みの軌跡」の考え方を示し、個人史の重要性を指摘した(黒江他訳:慢性疾患の病みの軌跡,医学書院,1995)。また、I.ラブキンらは、生活に与える影響をクロニックイルネスの衝撃として著した(黒江他訳:クロニックイルネス-人と病いの新たななかかわり-,医学書院,2007)。わが国においては、1984年に得永が自らの体験を踏まえ生活における慢性の病いの姿を著わし(得永幸子:「病い」の存在論,知湧社,1984)2000年代になると田中が精神障害者にとっての病いの意味(田中美恵子,ある精神障害・当事者にとっての病いの意味,聖路加看護学会誌,4巻1号,1-19,2000)秋山らが、対象者の生活史をライフヒストリー法を用いて描き、病いとともにある日常生活の姿を著している(秋山智也:地域生活を送る脊髄小脳変性症A氏の病気への対処行動に関する研究,日本難病看護学会誌,8巻2号,125-133,2003)。さらに能智は失語症患者における生活の場の意味づけについて当事者のストーリーを用いて著している(能智正博:ある失語症患者における「場の意味」の変遷,質的心理学研究,第5号,48-682006)。

(2) 着想の経緯

申請者らは、糖尿病を持つ人々を対象にした先行研究(黒江:女性の1型糖尿病における食行動異常に関する研究,平成11~13年度科学研究費補助金,研究課題番号11672400)において、医療職者を含め社会の人々による病気に対する反応に苦慮する対象者の姿を示し、生活・生活史についての的確な視点をもつことで、「病いのある生活」のあり様を知ることができることを指摘した(看護研究,35巻4号,焦点:慢性性Chronicityと生活史に焦点をあてた看護学的研究,2002)。その後、萌芽研究(黒江:慢性の病いにおける他者への言いづらさについての研究,平成17~19年度科学研究費補助金,研究課題番号17659674)において、「ライフストーリーインタビュー法」により生活の繊細さを描く立場を追究し、病いとともにある生活とその生活を営む主体としての「生活者」を捉えることの重要性を示し(黒江他:看護学における「生活者」という視点についての省察,看護研究,39巻5号,3-9,2006)病いの慢性性についてわが国でどのように考えることができるか看護学的に省察した(病いのクロニシティと生きることについての看護学的省察,日本慢性看護学会誌1巻1号,3-9,2007)。これらより、病いとともにある生活においては、他者への「言いづらさ」が確かに存在していることが推測され、どのような姿で存在しているのか、「言いづらさ」に先行する事象は何であるのか、「言いづらさ」が生活に与える影響は何であるのかにアプローチすることの重要性が導かれた。

2. 研究の目的

慢性の病いととも生活している人々が、病行の管理に必要な養生法を続けようとするときに、他者(自分以外の個人、集団、組織)に病気のことおよび病気の管理に必要な事柄をどのように伝えているか、それに伴う他者のどのような反応(言語表現・行動)に直面しているか等に関するインタビューによるストーリーから洞察された他者への「言いづらさ」に関し、H.S.キムらの理論構築の考え方を基盤として構築した「クライアント領域」「ナース-クライアント領域」「実践領域」の知見を基に創成した実践領域モデル案を看護実践者・研究者で共有・吟味し、看護実践に活用する。その成果を踏まえ、実践領域の知見を深化させ、諸領域を統合し、慢性の病いの「言いづらさ」を包摂した健康に生きる支援に関する看護理論の理論的構想を成立させ、成果を広く公表する。

3. 研究の方法

(1) H.S.キムらの理論構築の考え方に基づき、慢性の病いにおける「言いづらさ」に関して洞察された「クライアント領域」「ナース-クライアント領域」「実践領域」の知見から創成した実践領域モデル案を慢性看護領域の看護実践者及び研究者で共有・吟味し、看護実践で活用する。

(2) 実践領域モデル案を活用した看護実践者にインタビューを行うとともに、有識者会議を開催し、看護職者のストーリーを集積する。

(3) 看護職者のストーリーから言いづらさとケアに関する「エピソード」を導き、実践領域の洞察を深める。

(4) H.S.キム博士らとの会議を経て、「クライアント領域」「ナース-クライアント領域」「実践領域」を含む理論的構想を深化・統合し、慢性の病いの「言いづらさ」を包摂した健康に生きる支援に関する看護理論として論述し、公表する。

4. 研究成果

(1) 平成20年度～平成27年度

平成20年からは基盤研究(C)(黒江：慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」と看護のあり方についての研究,平成20-23年度科学研究費補助金,研究課題番号20592503)において、慢性の病いとともにある人々のライフストーリーを描き、それらのストーリーには「言いづらさ」に関し、慢性の病気自体が理解しがたく“他者に伝える言葉が見つからない”、あるいは病気について話すことで心配や迷惑をかけると思う“他者への気遣い”、他者に言うこと/言わないことでの“傷ついた体験”等が「言いづらさ」に繋がっていることを指摘し報告するとともに論議した(慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」と看護のあり方についての研究,研究成果中間報告書,平成22年3月) これらの内容については報告とともに論議した(黒江他：慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」,第4回日本慢性看護学会学術集会交流会,2010)(黒江他：慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」- ライフストーリーインタビューは何を描き出すか -, 看護研究,44巻3号,2011)。さらに、看護職者のストーリーから看護職者は人々の「言いづらさ」をその生活の中でとらえ、社会的立場、家族背景、および「生きることの意味」を踏まえてケアを提供していることを示し、かつ慢性の病いとともに生きる人々の「言いづらさ」と看護職者の「聴きづらさ」が同時に存在していることを報告した(黒江他：慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」- 看護職者のストーリーから -, 第5回日本慢性看護学会学術集会交流会,2011)。

平成24年からは基盤研究(C)(黒江：慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」と看護のあり方を基盤とした看護理論の構築,平成24-27年度科学研究費補助金,研究課題番号24593223)において、H.S.キムらの理論構築の考え方にに基づき、慢性の病いにおける「言いづらさ」を基盤とした理論構築の構成要素として、「クライアント領域」、「ナース-クライアント領域」、「実践領域」の特性を論述するため、まず慢性の病いとともに生活する人々のストーリーから洞察された慢性の病いにおける「言いづらさ」の「クライアント領域」の特性を論述し(黒江他：慢性の病いと他者への「言いづらさ」- 糖尿病におけるライフストーリーインタビューが描き出すもの -, 岐阜県立看護大学紀要,12巻1号,41-48,2012)(中岡亜希子他：パーキンソン病者における病いについての他者への「言いづらさ」,大阪府立大学看護学部紀要,19巻1号,63-72,2013) 2014・2015年のHS.キム博士との議論を踏まえ、「言いづらさ」の事象の先行要件(antecedents)と帰結(consequences)を含めた論述に深化させるとともに、慢性の病いにおける「言いづらさ」を伴う体験を、「本人の認識にかかわらず、「言わない」「言えない」「言いたくない」といった、「言う」事に抵抗や苦痛が生じていたと思われる体験」と説明した。さらに、日本の文化の中で「言いづらさ」がどのように在るかについて文学書を繙き(「こころ」「細雪」他) 私たちは古来より他者に配慮することによって「言いづらさ」を抱え、大切な人を守ろうとし、言う人と言わない人を思想的情動的に自ら決めて生きていることを著した(黒江・藤澤：慢性の病いにおける言いづらさの概念についての論考- ライフストーリーインタビューから導かれた先行要件と帰結 -, 岐阜県立看護大学紀要,15巻1号,115-121,2015)。「ナース-クライアント領域」に関しては、看護職者のストーリーから看護職者は対象者の「言いづらさ」を内的葛藤として共有し、他者に伝える新たな方策等を見いだしながらケアを提供していること等の特性を論述し(黒江・藤澤：慢性の病いと他者への「言いづらさ」- 糖尿病におけるライフストーリーインタビューが描き出すもの -, 岐阜県立看護大学紀要,12巻1号,41-48,2012) これらの知見を題材に「有識者会議」を開催した。慢性看護領域の看護実践者と研究者により、看護職者は実践において「言いづらさ」と自らの「聴きづらさ」に気づく必要があり、看護職者に対象者の語りを聴く姿勢があれば、人は言いづらさから解放され、多くのことを語りことができ、他者に伝えることの意味が深まり、可能性が拓かれること等が論議された。「実践領域」の知見を一層深めるため、有識者会議を重ねて開催し(2014-2015) 会議において示唆された内容から慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」を基盤とした実践領域モデル案を創成し、看護理論の理論的構想を構築した。

(2) 平成28年度～令和元年度

平成28年度からは、これまでの知見をふまえ、「有識者会議」を継続し、ライフストーリーインタビュー、慢性の病いとともにある人々の体験記(「色鉛筆がくれた希望-クローン病を患って見つけた幸せのかたち-」「ごめんね、僕が病気になって」「難病ALSの夫を見守って」「なんとかなるよ 統合失調症- がんばりすぎない闘病記」「絶望なんかで夢は死なない- 難病Jリーガー杉山新、今日も全力疾走」「糖尿病と私」) 及び日本における近代小説(「破戒」(島崎藤村)「蒲団」(田山花袋)「新世帯」(徳田秋声)「入り江のほとり」(正宗白鳥)「耽溺」(岩野泡鳴)「雁」(森鷗外))から導かれる私たちに与える「言いづらさ」に関する内容を踏まえ、「クライアント領域」「ナース-クライアント領域」「実践領域」の関係性を熟考し、そこに含まれている先行経験と帰結を基盤として、統合を試みるとともに、R.アトキンソンによる元型的経験として「言いづらさ」のフェーズを記述することに取り組んだ。

慢性の病いとともにある人々の体験記においては、他者への「言いづらさ」がそれぞれの体験記に著されており、7つの体験記から導かれた先行要件は、「他者への気遣い」「傷ついた体験」「仕事への影響の懸念」「病気の理解が難しい」「病気を説明する言葉が見つからない」「社会的偏見との遭遇」であり、帰結としては、ライフストーリーから導かれた「言いづらさが「解ける」」に自己の認識の拡がり自立性が加わった「言いづらさが「超越される」」が導かれた(黒江・藤澤：クロニックイイルネスにおける他者への「言いづらさ」- 病いにおける体験記をふまえた論考 -, 岐阜県立看護大学紀要,18(1),135-142,2018)。また、日本における近代小説から導かれた先行要件は、「他者への気遣い」「傷ついた体験」「仕事への影響の懸念」「状況の理解が難し

い」「説明する言葉が見つからない」「社会的偏見との遭遇」であり、「病気を説明する言葉が見つからない」ではなく、「(状況を)説明する言葉が見つからない」が導かれ、病気状況に限らず、日本社会においては「他者への気遣い」や「社会的偏見との遭遇」等が多様な「言いづらさ」に繋がっていることが導かれた(黒江・藤澤:クロニックイリネスにおける他者への「言いづらさ」- 日本文学における近代小説に著わされた事象をふまえた論考 -、岐阜県立看護大学紀要、19(1) 147-154、2019)。また、国際学会で報告し、諸外国の看護職者と意見交流し、これは日本だけの事象ではないとの意見が多く寄せられた(Yuriko Kuroe, Minoru Takarada, Yuko Tanaka: Difficulty in telling to others about chronic illness: Based on Life Stories and Japanese Literary Works、45th Annual Conference of the Transcultural Nursing Society, in Richmond, Oct16-19, 2019)。ライフストーリー、体験記、近代小説から導かれた先行要件を統合し、「病気の理解が難しい」「語る言葉が見つからない」「傷ついた体験」「他者への気遣い」「仕事への影響の懸念」「社会的偏見との遭遇」に精選するとともに、私たち人間の日々の生活におけるストーリー性を踏まえ、先行要件を「先行体験」として整えた。元型的経験としては、「別離のモチーフ:新しい苦悩」において「病気の理解が難しい」「語る言葉が見つからない」「傷ついた体験」「他者への気遣い」等が「言いづらさ」(本人の認識にかかわらず、言わない、言えない、言いたくないといった言うことに抵抗や苦痛が生じている体験)に繋がり、「行動のモチーフ:混乱」では「病気でないように振る舞う」「居場所」の喪失」「病気について沈黙する」「混乱の人間関係に耐える」「アイデンティティの揺らぎ」がみられ、「行動のモチーフ:他者からのサポート」では、「語り合える人」との出会いがあると「言う人と言わない人に一線を引く」等が可能となり、自らのコントロール感を取り戻すと同時に病気が生活に溶け込み、「帰還のモチーフ:自覚的に生きる」の「言いづらさが「解ける」あるいは「言いづらさが「超越」される」に繋がることの解釈が可能になった。

また、ナース-クライアント領域においては、看護職は患者との相互作用を重ねること、特に、患者との相互作用において、自分が十分に対応できていないという認識がどこかでなされ、他者に自分の語りを聴いてもらったという対話が経験知として有することの重要性が指摘されるとともに、自身の生活体験を重ねることが患者の「ライフストーリー」を聴く力となっていることが示唆された。看護職者のライフストーリー及び有識者会議から、ケアに関するエピソードとダイアログが導かれた。それらを通して、「言いづらさ」を踏まえた実践領域モデルには、看護の問題を発見しようとする行為が、対象の諸事象の複雑性の認知を遅らせることがあり、「深い対話」の力が重要であること、及びそれを可能にするには、自己の語りを他者に聴いてもらう体験や「誰のためなのか」を自己に問う力が不可欠であると指摘され、それらの視点を実践領域モデルに加えた。同時にそれは、ナース-クライアント領域における看護職の「聴きづらさ」を超越すると考えられた。

看護職の聴きづらさを超えるストーリーの元型的経験として、「始まりのモチーフ」では、看護職者としての自己の現れ、「行動のモチーフ」として、a.看護職としての知と技(わざ)と哲学の醸成、b.葛藤/混乱:個人的な基準が試される(患者さんにとっての本当の良い状態とは何か、自分の優れた技術ではなぜ十分ではないのか)、c.自分の影の部分との出会い、d.他者からのサポート・他者との関わりによる気づき、e.自己の認識の拡大、f.新しい挑戦に向かう準備、g.理想や価値のトライアル、h.看護職としての自分と一人の人間としての自分の相互作用、「帰還のモチーフ」として洞察力が深化し潜在能力が解き放たれる等が導かれた。

さらに、実践領域においては、実践領域モデルとしてフェーズa~フェーズeが著わされ、次のように確認された。フェーズa:慢性の病いの特性について知り、これまで培ってきた自らの認識を確認する。フェーズb:慢性の病いにおける「言いづらさ」と「聴きづらさ」に気づき、「語りを聴く姿勢」を整える。フェーズc:慢性の病いとともに生活する人々の語りを聴く時と場を日々のケアの中に取り入れる。フェーズd:慢性の病いにおける「言いづらさ」を踏まえて、自らの健康生活を考えることができるように支援する。フェーズe:看護実践における上記の取り組みについて、看護職相互に意見交流し、「省察」を行う。有識者会議を重ねたところ、看護職がこれらのフェーズを活用するためには、看護職自らが自分の体験を語り、それを他者に聴いてもらった体験が重要であることが指摘され、アンテセーデンツ(事前要件)として加えられ、実践領域モデルの修正版として以下が提示された。

アンテセーデンツ(事前要件):自己の語りを他者に聴いてもらう体験があること。

フェーズa:慢性の病いの特性について知り、これまで培ってきた自らの認識を確認する。

フェーズb:慢性の病いにおける「言いづらさ」と「聴きづらさ」に気づき、「語りを聴く姿勢」を整える。

フェーズc:慢性の病いとともに生活する人々の語りを聴く「時と場」を日々のケアの中に取り入れる。

フェーズd:対象者が自らの健康生活を考えることができるように、慢性の病いにおける「言いづらさ」を考慮しながら、支援する。

フェーズe:看護実践における上記の取り組みについて、看護職相互に意見交流し、「省察」を行う。

これらの内容を基盤に報告書を作成した(慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」を基盤とした看護理論の創成とその活用 課題研究番号 16K11920 平成28年度~令和元年度科学研究費補助金「基盤研究C」、研究成果報告書、令和2年3月、研究代表者黒江ゆり子)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 黒江ゆり子	4. 巻 31 (3)
2. 論文標題 リウマチ性疾患の看護：社会面への援助～クロニックイルネスにおける '生活者' をとらえる～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本臨床リウマチ学会雑誌	6. 最初と最後の頁 239-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 黒江ゆり子	4. 巻 25 (1)
2. 論文標題 看護実践の質を高める「省察的事例研究法」のあり方 - 新たな研究デザインへの深化 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 看護診断	6. 最初と最後の頁 50-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 黒江ゆり子	4. 巻 273 (2)
2. 論文標題 保健医療におけるスティグマ - 人々の内面の動きとアドボケイトとしてのあり方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 医学のあゆみ	6. 最初と最後の頁 145-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 黒江ゆり子、藤澤まこと	4. 巻 19 (1)
2. 論文標題 クロニックイルネスにおける他者への「言いづらさ」 - 日本文学における近代小説に著わされた事象をふまえた論考 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岐阜県立看護大学紀要	6. 最初と最後の頁 147-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内田雅子、小長谷百絵、木下幸代、森田夏実、段ノ上秀雄、黒江ゆり子	4. 巻 67
2. 論文標題 事例研究を用いた看護師育成の組織的方策の意義-省察的実践の支援に焦点をあてて-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 高知県立大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒江ゆり子	4. 巻 12(2)
2. 論文標題 病いとともに生きる人々を支える実践の伝承	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本慢性看護学会誌	6. 最初と最後の頁 78-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒江ゆり子、藤澤まこと	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 クロニックイルネスにおける他者への「言いづらさ」-病いにおける体験記をふまえた論考-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岐阜県立看護大学紀要	6. 最初と最後の頁 135-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柴田万智子、黒江ゆり子	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 糖尿病における療養生活の継続支援体制の充実	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岐阜県立看護大学紀要	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊清美、黒江ゆり子	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 回復期リハビリテーション病棟における在宅療養に向けた退院調整プログラムの開発を基盤とした退院支援体制の充実	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岐阜県立看護大学紀要	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒江ゆり子、藤沢まこと	4. 巻 17
2. 論文標題 看護学における質的事例研究法の特性に関する論考	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 岐阜県立看護大学紀要	6. 最初と最後の頁 147-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒江ゆり子	4. 巻 41
2. 論文標題 看護学における事例研究法の可能性 - ライフストーリーインタビューとともに -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 聖マリア医学	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件(うち招待講演 3件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 黒江ゆり子
2. 発表標題 多職種で考える最適なリウマチケア, '生活者'を支援する知と技(わざ) -, living with illnessの視点から -
3. 学会等名 第63回日本リウマチ学会学術集会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒江ゆり子、内田雅子他
2. 発表標題 慢性看護実践における事例研究法
3. 学会等名 第13回日本慢性看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuriko KUROE, Minori TAKARADA, and Yuka TANAKA
2. 発表標題 Difficulty in Telling to Others about Chronic Illness: Based on Life Stories and Japanese Literary Works
3. 学会等名 45th Annual Conference of the Transcultural Nursing Society (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒江ゆり子、宝田穂、田中結華、市橋恵子、中岡亜希子、森谷利香、藤澤まこと
2. 発表標題 慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」に関する知の構築
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒江ゆり子
2. 発表標題 病いとともに生きる人々を支える実践の伝承
3. 学会等名 第12回日本慢性看護学会学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒江ゆり子、伊波早苗、山本真矢、山本力、
2. 発表標題 事例研究を目指した実践の振り返り
3. 学会等名 第12回日本慢性看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 房間美恵、東香代子、中原英子、黒江ゆり子
2. 発表標題 関節リウマチを抱えて生きてきた人の「病みの軌跡」
3. 学会等名 第12回日本慢性看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中原英子、須崎みどり、上杉裕子、原井宏明、黒江ゆり子
2. 発表標題 看護シンポジウム：リウマチ疾患の患者さんと医療職者を繋ぐ看護師の支援 - 最高の医療を届けるために -
3. 学会等名 第33回日本臨床リウマチ学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒江ゆり子
2. 発表標題 慢性病者の看護の知の構築と技の発展を目指して
3. 学会等名 第85回クリニカルケア研究会15周年記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuriko Kuroe and Minori Takarada
2. 発表標題 Difficulty in telling to Others(Iizurasa) Experienced by People living with Intractable Neurological Disease in Their Daily Lives in Japan
3. 学会等名 Trans Cultural Nursing Society 43rd Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 黒江ゆり子、藤澤まこと、伊波早苗
2. 発表標題 新たなデザインとしての事例研究法について〔交流セッション 〕
3. 学会等名 第23回日本看護診断学会学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 内田雅子、黒江ゆり子、東めぐみ他
2. 発表標題 心理臨床学に学ぶ事例研究法その3-慢性看護実践の事例研究を支援する事例発表スタイルの検討〔交流集会 〕
3. 学会等名 第11回日本慢性看護学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuriko Kuroe and Minori Takarada
2. 発表標題 "Difficulty in Telling" to others Experienced by People Living with Chronic Illness
3. 学会等名 42nd Annual Conference of the Transcultural Nursing Society (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 黒江ゆり子 in 房間美恵, 竹内勤 監修	4. 発行年 2019年
2. 出版社 羊土社	5. 総ページ数 286
3. 書名 関節リウマチ 看護ガイドブック	

1. 著者名 黒江 ゆり子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 331
3. 書名 成人看護学[6] 内分泌・代謝 第15版	

1. 著者名 黒江ゆり子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 メヂカルフレンド社	5. 総ページ数 382
3. 書名 成人看護学 成人看護学概論/成人保健	

1. 著者名 黒江ゆり子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 メヂカルフレンド	5. 総ページ数 349
3. 書名 慢性期看護	

1. 著者名 黒江ゆり子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 314
3. 書名 内分泌・代謝	

1. 著者名 黒江ゆり子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ヌーベルヒロカワ	5. 総ページ数 524
3. 書名 慢性期看護論	

1. 著者名 黒江ゆり子、高澤和永、吉岡成人、和田典夫、藤沢まこと他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 314
3. 書名 内分泌・代謝	

1. 著者名 安酸史子、鈴木純恵、吉田澄恵、黒江ゆり子他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 メディカ出版	5. 総ページ数 284
3. 書名 成人看護概論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	竇田 穂 (TAKARADA MINORI) (00321133)	武庫川女子大学・看護学部・教授 (34517)	
研究分担者	藤澤 まこと (FUJISAWA MAKOTO) (70336634)	岐阜県立看護大学・看護学部・教授(移行) (23702)	
研究分担者	田中 結華 (TANAKA YUKA) (80236645)	摂南大学・看護学部・教授 (34428)	
研究協力者	市橋 恵子 (ICHIHASHI KEIKO)		
研究協力者	加藤 千恵 (KATO CHIE)		
研究協力者	山田 吉子 (YAMADA YOSHIKO)		
研究協力者	山本 かおり (YAMAMOTO KAORI)		
研究協力者	増井 法子 (MASUI NORIKO)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	小林 美保 (KOBAYASHI MIHO)		
連携 研究者	中岡 亜希子 (NAKAOKA AKIKO) (60353041)	大阪府立大学・看護学部・准教授 (24403)	
連携 研究者	森谷 利香 (MORIYA RIKA) (20549381)	摂南大学・看護学部・講師 (34428)	
連携 研究者	古城門靖子 (FURUKIDO YASUKO) (40379441)	日本赤十字看護大学・看護学部・講師 (32693)	
連携 研究者	河井 伸子 (KAWAI NOBUKO) (50342233)	神戸市看護大学・看護学部・准教授 (24505)	